

第1分科会

シンポジウム「応援しよう！
子どもの読書－学校・家庭・
地域で支える－」パート2

パネリスト

石田 信子 (さいたま市立文蔵小学校司書教諭)

斉藤 久子 (さいたま市立上小小学校司書)

山本 文子 (北本子どもの本を楽しむ会)

コーディネーター

福田 孝子 (三郷市教育委員会読書活動支援員)

はじめに、福田孝子氏が子どもの読書をめぐる流れや様子を紹介した。

1 子ども読書活動推進の流れ

2000年「子ども読書年」から2010年「国民読書年」の間、子どもの読書活動が推進されボランティア活動が学校で盛んになった。

2 学校図書館の機能と役割について(「文部科学省サポーターズ会議」より)

①読書センター②学習情報センター③心の居場所づくり④教職員のサポート機能(教科等の指導に際し、適切な指導資料や教材、情報等を提供することにより教職員を応援)

3 学校図書館を支える人達

①司書教諭：教育委員会から12学級以上には必ず発令(学校図書館教育主任等)②学校司書(図書館整理員等)③ボランティア(読み聞かせ、図書作業実施)

実践報告1 読書活動の推進を目指した「保護者・地域との連携」石田信子氏(さいたま市立文蔵小学校司書教諭)

平成17～19年度「特色ある学校づくりー学校図書館地域開放事業」の研究指定を受け、平成21年度読書活動優秀実践校(文科省)受賞。20年以上前から地域の方と「読書郵便」に取り組む良き伝統があった。図書館の特徴として、学校図書館(同校では「ブックワー

ルド」と呼ぶ)は校舎を通らずに出入りできる立地にある。

図書ボランティア(52名登録、重複登録あり)

- ①ブックワールド(掲示物の作成・本の整備など)18名
- ②朝の読み聞かせ16名
- ③放課後開放(ブックワールドの開放を支える)9名
- ④読書郵便(児童の書いた読書郵便への返事)21名

実践の概要

- 1 ブックワールドの環境整備
- 2 子ども読書フェスティバルの開催
- 3 地域の方が作者である物語の大型紙芝居作成と発表
- 4 ブックワールドのキャラクターの作成
耳が本の「よむぞう君」、しおりの「しおピョン」、「本のすずめ」
- 5 放課後や夏休みの期間中の図書館開放
- 6 「読書まつり」における本の交換会
- 7 「読書郵便」の取り組み
一人年間3回以上(親子、同じクラスの友達、読書郵便ボランティア等との同一図書についての紙面上の感想交流。)
- 8 本や地域の人材を活用した授業研究
- 9 読み聞かせ…ボランティアから児童へ、担任の先生から児童へ、図書委員会から全校児童へ、縦割り学級内で高学年から低学年へ。

◎成果 ①高学年を含め、全校児童の9割が読書好き②担任でも親でもない人と関わることで、情緒面の豊かさに繋がっていくと期待③保護者・地域との連携が、読書活動外の場面でも活性化した。

◎課題 ①ボランティアの人数確保②学校の意向を理解してもらうこと③図書館開放時における登下校の安全面をどうするか。

以上、子どもたちの生活の中に読書活動が行き渡り、「読書の文蔵小」を支える保護者・地域のパワーが報告された。

実践報告2 学校図書館司書の役割について

齊藤久子氏（さいたま市立上小小学校学校司書）

1 はじめに

学校司書として8年目で現在2校目となる。上小小学校は16クラス480名の中規模校。さいたま市の学校図書館司書は、旧浦和市で平成7年ごろから小中学校に配置されはじめ、平成19年には市内全校に配置された。週4日1日6時間勤務で、長期休業中の勤務はない。上小小学校の学校図書館は廊下を挟んで、ブックルーム（物語中心の蔵書と貸出カウンタ）とよむよむルーム（調べ学習に使う部屋）の二つに分かれている。

2 日々の業務

本の貸出しをはじめとして、授業で使う資料の収集と提供、読み聞かせといった仕事のほかに、さいたま市では資源共有システムにより市立図書館や他校から授業で使う本を借りたり、貸したりしている。実際の仕事の様子を10月のとある1日を例に紹介。仕事が多岐にわたり、1日6時間の勤務では仕事が終わらないのが実情である。また、「読書通帳」を使った取組は上小小独自のものである。子どもたちの読書意欲をかき立て、司書が本のアドバイスをするのに役立っている。

3 年間の中での取り組みについて

①図書室開きのオリエンテーションを全クラスで行う。②図書ボランティアによる「子ども読書の日」のイベント③秋の読書週間はブックウォークに取り組む。

4 授業支援について

学校課題研究で「図書資料を活用した国語科学習指導の工夫」について取り組んでいる。

5 先生、ボランティアとの連携について

先生方とコミュニケーションをなるべく密にとるように努めているが、一番私が連携を取っているのは、やはり司書教諭である。私にとっての学校の窓口になる人なので、放課後や休み時間を使い、日々の業務から私の考えたこと、困ったことの相談まで、いろん

な話をしている。また、図書ボランティアの存在はとても大きい。現在20名ほどだが、さまざまな仕事をしている。子どもたちの読書を支えるという点で欠かすことのできない存在である。

6 まとめとして

最近の学校図書館は読書という面と情報センターという二つの顔をもっている。そのためには図書室の資料に関するプロがいて、学習に即した資料を収集してあり、子どもたちに情報が提供できるということは、とくに意義があることではないかと思う。子どもたちはどんな本が好きか、なんの本を借りているか把握し、図書室に人がいることで、子どもたちは本を借りるだけでなく、いろいろなことを話しにも来る。教室とは違った顔をもせ、のんびりとくつろぐ姿をみせてもくれる。子どもの読書を支えていく上で、司書という仕事は本と子どものかけ橋のような仕事だと思う。これからも一人でも多く、1冊でも多くの本を子どもたちに手渡していければいいと考えている。

実践報告3 ボランティアの立場から

山本文子氏（北本子どもの本を楽しむ会）

1 「北本子どもの本を楽しむ会」とは

①「北本子どもの本を楽しむ会」は昭和59年「子どもの本や読書に関する学習の場がほしい」との思いで発足した自主グループ②活動は週1回（発足当初より保育実施）③会員26名（30代～60代）

2 活動の柱 ①読み聞かせとおはなし会②子どもの本を学ぶ会③おはなしボランティアの活動④児童文学講座・読書まつりなど

3 おはなしボランティアをするための学習

①おはなし②絵本③わらべうた④手遊び等

4 おはなしボランティアの活動（北本市子ども文庫連絡会との活動）

①保育所、図書館、学童でのボランティア②小学校（8校）朝の読書タイムでの読み聞かせ。最低各学年、

子ども読書活動交流集会

年2回は行う。司書教諭との打合せ。読書指導員（週3日1日5時間）との連携。

5 学校におけるボランティア活動を通して見えてきた課題 14年間、学校と関わってきた。学校のなかに学校応援団というものがある組織されていて、この中に図書ボランティアがおかれている例もある。学校図書館がボランティアにより運営されている場合もある。

(1) 学校の課題 ①学校図書館をどのように運営していくかは学校の課題である。ボランティアでは運営できない。ボランティアがいるから大丈夫と考えるのは間違いである。子どもたちの学習や読書のために何が必要で、学校の教育活動と結びついて図書館全体のことを考えることはボランティアではできない。学校図書館が学校の中でどのように位置づけられ、どう活用されるか、その上でボランティアにどうかかわっていくか、学校は考えて欲しい。②ボランティアに任せっきりにしていないか。読み聞かせは子どもに身近な親や担任の先生、学校司書が一番よい。ボランティアは語り等、先生や学校司書ができないところを支援する存在でありたい。本の紹介などボランティアの力量以上のことや本の選書等は対応できない。③複数のボランティアをコーディネートする力量があるか。

(2) ボランティアの課題 ①「ボランティア」の立場を逸脱していないか。②子どもの本を学びもしないで読み聞かせなどしていないか。長く関わっていて立場が逆転してはいないか。③子どものプライバシーに配慮しているか。

(3) 公共図書館の課題 市町村レベルでのボランティアを支援する体制がほしい。公共図書館の役割に学校図書館支援がある。図書館が中心となったボランティアの研修の実施。

6 まとめ ボランティア活動の広がりや子どもと読書に関わる人が増えていくことはいいことだが、学校図書館には司書教諭がいて学校司書がいて、しかも専門専任で常勤であれば子どもの読書や学習にとって最高の形

だ。その上でボランティアが関われば良いと思う。今はそれができないところが多く残念。「学校図書館は専門の人が必要ね。」という声が多まってほしい。



福田: 3人の発表から見えてきたことは、司書教諭、学校司書、ボランティアの連携をどうしていくか。文蔵小はボランティア活動が活発に進められている。そのご苦労は？

石田: 放課後開放を始めるとき大変だった。核となる地域の方（リーダー）の存在が大きかった。

福田: 学校とのルール作りは？

石田: 9月を区切りにボランティア会議を持つ。学校教育の一環として話し合いを持った。

斉藤: 5月を区切りとして、毎年会議を持つ。

石田: ボランティアに最初から先生が関わるのが基本と思う。学校図書館をどういう風にしたかが決まっていなくてボランティアは活動しにくい。学校の基本的な姿勢が必要。

福田: 学校司書と司書教諭の連携は？

斉藤: お互いが学校図書館に何を求めているかを出し合い話し合うことがうまくいく秘訣。

石田: 教員も忙しいが、学校司書は午後4時までなので、連絡帳などを使っている。

福田: ボランティアの側から学校との連携をどう期待するか？

山本: 学校司書は学校図書館のことをよくわかってほしい。それがボランティアの信頼を得る。

福田: 学校司書としての資質、研修も必要。

司書教諭として他の教職員に何かやっていることは？

石田：学校内の図書館教育部で学校全体の読書活動の計画を立てること、各学年の図書館を活用できる授業を洗い出し紹介していく活動をしている。それを学校司書が共有することで見通しをもってもらう。本の選定に学校司書も加わって行っている。図書館と先生を結び付ける役割を考えている。

福田：司書教諭の持つ役割は大きい。他の教職員と結び付けることによって学校図書館の活用の仕方が変わってくる。

斉藤：各学年にどんな授業がしたいのかどんな資料が必要なのかのコミュニケーションを密にとるようにしている。

福田：公共図書館との関わりは？

石田：近くにある南浦和図書館で、ボランティアをサポートする講座をしている。

斉藤：さいたま市では団体登録をすると本を1ヶ月借りることができる。

石田：司書教諭・学校司書・地域の公共図書館と一堂に会し、情報交換している。

福田：この分科会もボランティアの活動で運営されている。その方々の学校との関わり等はどうか？

浦和子どもの本連絡会：司書教諭と図書館にこんな本をそろえてもらうなど話した。おはなし会が終わり、児童がその本を手にとってみられるようにしてほしいと願う。深く交流し、連携できればいいなと思った。

あいのみ文庫(越谷)：文庫単独で図書ボランティアのための講座をおこなった。ボランティアが学校に入るには質を高めなければ。あいのみ文庫が朝の読書で学校に入る時には司書教諭や読書支援員と話し合っただけで授業に入っている。おはなし会で使った本が、実際に手に取れるように子どもたちの目に触れてほしいと、市立図書館から集団貸出を受けておもむき、返却は各学校が行うことなどを行っている。ボランティアができること、やり過ぎな

いことなど、学校との連携でしている。子どもたちにとって何がいいかということの共通性が必要。公立図書館・学校・ボランティアが連携していくことが大事。

福田：三郷市でも昨年度から学校司書が週2日入り学校の整備が進んだ。週4日でも足りないという点をどうしたいと思うか？

斉藤：5日になれば先生方との連携がもっとうまく行くのではと思っている。目に見えない仕事をする時間が必要。

会場から：北本市では司書の資格を問わないとの話だが先生達がどう要望しているか？

山本：現場の声はあるが市までは届いてない。北本市子ども文庫連絡会では要望している。

福田：今は学校司書を図書館にという声が大きくなってきている。学校司書は法的裏付けもない。また、司書教諭・学校司書・ボランティアの連携をどう進めるか、きちんとしたルールに基づき話し合い、協力をどこでできるか確認しながら、一歩ずつ前進していくこと、自分の立場でどうしていくか、いろんな課題はあるが昨年度より前進してきている。この会もより深いところで話し合いができた。

3人の実践の中から学べたことを、明日への実践に使おうと思っていただけたと思う。

最後に『おとうさんのちず』(シュルヴィッツ/著 あすなろ書房)を紹介したい。お父さんは地図を手渡したが、私たちは何を子ども達に何を手渡せるのであろうか。それは本であろう、読書する力であろうと思います。

3.11の震災の中で子ども達に対し本の力はとても大きいものでした。私たちが子ども達に本を手渡すということは、子どもの心に豊かな生活、豊かな心だけでなく生きる力を手渡していくことに通じると思う。今日のシンポジウムを糧に、また明日から子ども達と本をつなぐ活動に、一歩でも前進していただけたらと思います。

司会・閉会の挨拶：中村恵太郎

(飯能市立加治東小学校校長)